様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３４３１９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2020
課題番号：１９Ｋ２３３１４

研究課題名（和文）国際バカロレアの教育方法導入の意義と課題―社会科系科目に焦点を合わせて

研究課題名（英文）The significance and problems of the introduction of the educational methods of the International Baccalaureate; focusing on social studies subjects

研究代表者
次橋　秀樹（TSUGIHASHI, Hideki）

京都芸術大学・芸術学部・講師

研究者番号：３０８５２１２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、国際バカロレア（IB）の教育方法の導入が、日本の学校教育に対してどのような意義と課題をもつのかを明らかにすることを目的として、IBの前期中等教育（MYP）における科目「個人と社会」および後期中等教育（DP）における科目「歴史」を検討した。
テキストの内容・構成やDP最終試験の問題、国内のIB認定校（一条校）の授業実践についての情報収集と分析を通して、日本の学習指導要領とIBの教育内容の差異や、構造化された知識や問いから成り立つ授業の特徴、導入にあたる学校現場での成果や困難等を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年、海外のみならず日本でも注目されるIBは、たんに一つの試験の名称やその成否を指すものではなく、教育方法・教育内容・教育方法などにおいて規定のある教育プログラムである。本研究では、これまで十分に明らかにされてこなかった社会科系教科におけるIBの教育内容・教育方法の内実を検討した。本研究で得られた成果からは、社会科系科目の全体及び単元カリキュラム構想、授業づくり（とくに発問・パフォーマンス課題検討）のうえで多くの示唆を得ることができる。また、大学入学資格を問う制度として見れば、日本の選抜型大学入試を固定的な観念で捉えることを避け、相対化するための視座にもつながるだろう。

研究成果の概要（英文）：This study examined the subjects “Individuals and Societies” in the International Baccalaureate (IB)’s lower secondary education (MYP) and “History” in upper secondary education (DP).
This study aimed to examine the significance and problems of the introduction of the educational methods of the IB in Japanese education. To this end, it collected and analyzed information on the contents and composition of the IB’s texts, its final examination, and its lesson practice in IB schools in Japan, as authorized by the International Baccalaureate Organization. In doing so, it clarified the differences between the educational contents of the IB and the Japanese Courses of Study, as well as difficulties in the introduction of the IB in Japanese schools.

研究分野：教育方法学

キーワード：国際バカロレア　カリキュラム　社会科教育　教育評価

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、世界的な潮流として IB が注目され、IB の理念のもとで規定されたプログラムの教育を行う認定校も国内外で増加している。その要因としては、グローバル化の中で広く世界の大学への入学資格として通用したり、よりハイレベルな大学入学資格として自国の入試制度の一部を担ったりするといった入試としての有用性も挙げられるが、それだけに限られるものではない。例えば日本では、IB が目指す学習者像や育もうとしている力が、OECD のキー・コンピテンシーや学習指導要領の「生きる力」、「主体的・対話的で深い学び」などとも通じる現代的な要求を満たすものであり、その実現のために練り上げられてきた教育方法や評価方法へ注目することが、自国の教育方法に好ましい影響を与えるという期待も見受けられる。しかしながら、IB の理念や教育プログラム全体像ではなく、また TOK（知の理論）のような IB 独自のプログラムでもなく、類似する教科個別のカリキュラムにおいて日本の教育課程や入試制度とどのような相違があるのかについての研究は十分ではない。

２．研究の目的

筆者は本研究に至るまでに、IB の成立過程に注目し、IB が中等教育段階の教育において網羅的な知識の伝達ではなく深い思考を重視する一方で、学び手が学習教科数を絞り込んで過度に専門化することのないように配慮してきたこと、すなわち「深さ」と「広さ」のバランスを重視してきたことを明らかにした（次橋秀樹「A. D. C. ピーターソンのカリキュラム構想に見る一般教育観―シックス・フォーム改革案から国際バカロレアへの連続性に注目して―」『カリキュラム研究』第 26 号、2017 年、pp.1-13。）。

本研究では、プログラム全体ではなく、教科個別に IB の目指す「広さ」と「深さ」を、日本の学校教育、とくに学習指導要領と対置しつつ検討する。この、IB の各科目なかでも、社会科系の科目は学習指導要領との差異が大きいと見られている。大学入学資格となる後期中等教育段階の DP（ディプロマ・プログラム）において、数学・物理・科学・生物・英語については特例として学習指導要領上の必履修科目の履修・修得に代えることが認められている（平成 27 年文部科学省告示第 127 号）ものの、社会科系の科目は認められなかった［現在では基準が一部改正され、世界史・日本史・地理（と一部数学系科目）について、上記科目にはない「基準を満たしている場合には」という条件付き――そのうちの一つは学習指導要領に定める内容事項が適切に取り扱われること――で認められた（令和元年文部科学省告示第 1274 号）］。これは主として教育内容についての差異の問題であるが、一方で各教科の教育方法もまた大きく異なっている。「IB の受容で日本に特徴的だと考えられるのは、それを丸ごと受け入れるのではなく、既存の教育実践を IB を通して再評価しつつ擦り合わせを行う中でこれまでの教育内容と実践を変化させていく方法が取られていること」（渡邉雅子「国際バカロレアにみるグローバル時代の教育内容と社会化」『教育学研究』第 81 巻、第 2 号、2014 年 6 月、p.46。）とされるが、社会科系科目においてどのように教育方法の差異があり、この受容においては実践を変化させていく必要があるかについても、教育現場の実態を視野に入れつつ検討する。

３．研究の方法

本研究では、IB の教育方法の意義と課題を検討するために、IB の求める「広さ」と、「深さ」の内実を明らかにすることを試みた。

(1)「広さ」については、学習範囲とその中での用語知識に注目した。IB の前期中等教育（MYP）における「個人と社会」と日本の中学校「社会」、後期中等教育（DP）における「歴史」科目と日本の高等学校「日本史」・「世界史」の学習内容について、教科全体で取り扱っている学習単元の比較を行うことで、学習範囲を確認するとともに、類似単元を取り上げて用語知識の取り扱いについても比較検討する。なお MYP については、知識の構造化や指定されたスキルの意識化など、一定の教育方法で行うことが求められるものの、教育内容については規定されない。ゆえに日本では学習指導要領と検定教科書に基づく授業を展開することも可能であるが、本研究では IB の一般的な学習内容の一例として、また(2)における授業展開の参考として市販の IB テキスト（Hodder Education 社）を取り上げた。

(2)「深さ」については、IB の社会系科目で用いられる「問い」がどのようなもので、それがどのように評価されるのかを検討する。指標の一つとして、上記テキストに示される問いや、IB の最終試験（世界共通テスト）の問題検討も行う。国際バカロレア機構が発行する「指導の手引き」および「教師用参考資料」、海外で用いられている市販テキスト（DP については PEARSON 社や

CAMBRIDGE 社のテキスト）を参考にするほか、IB の教育方法の理論的支柱となっている L. エリクソンの著作についても検討する。

(3)これら(1)(2)について、主に資料をもとにした分析を進めつつ、日本の教科教育における IB の総合的かつ現実的な意義と課題を検討するためには、実践校の社会科教員と連携した研究を行う。例えば日本の IB 認定校では、国内の大学進学や一条校としての学習指導要領との兼ね合いもあって日本の教科書を用いてカリキュラムを設計している場合があるが、ここでは IB の探究的な教育方法と日本の教科書や入試が求める網羅的な教育内容との両立に悩むケースがある。こういった具体的で現実的な課題をどのように克服しようとしているのか、また現場で担当教師が感じている意義についても、実践校を継続的に訪問してヒアリング等を行いつつ検討する。

４．研究成果

(1)IB の「広さ」については、MYP は「個人と社会」のテキスト、DP は公式資料である『「歴史」指導の手引き』、『「歴史」教師用参考資料』および最終試験問題を通して学習範囲を明らかにした。MYP「個人と社会」のテキスト（Hodder Education 社）によれば、IB の学習範囲は、日本の中学社会と歴史・地理・公民の領域において、日本に関する歴史・地理・政治システム以外については大きく変わるものではなく、広い範囲をカバーするものであった。とくに MYP1～3 年生では歴史・地理・公民的内容がバランスよく、4～5 年生では持続可能性に関連付けられた単元が多く配置されている。その国際的な性格上やむを得ないとはいえ特定の国の歴史に比重が置かれていることはないが、歴史では古代から現代まで一通り収められている。一方、DP 最終試験「歴史」においては、複数の知識や事例の比較・対比を求めたり、上級レベル（HL）では日本を含めて地域を限定した設問が見られたりするものの、近現代史が中心的に扱われている。授業においてどの範囲を扱うかは教員に任されているために教員が独自に広範囲を対象とすることもできるとは言えるものの、最終試験の出題範囲には大きな偏りがある。

(2)IB の「深さ」について、まずテキストは、概念理解と「事実的な問い／概念的な問い／論争的な問い」に整理された問いの探究を中心に組み立てられた単元構成や教育方法において、日本の現行教科書のつくりと大きく異なっている。これらを理論的に支えるエリクソンが提唱する概念型カリキュラムは、MYP カリキュラムに直接的な影響を与えているが、知識の捉え方（構造化）において IB とまったく同一というわけではなく、IB ではやや簡略化されている。この、エリクソンの文献研究については、G. ウィギンズや J. マクタイによる「逆向き設計」との類似性なども意識しつつ行った。また、長文記述によって解答することが求められる DP 最終試験では、「分析」「比較・対比」「評価」「考察」「どの程度」という予め定義された言葉によって問われること、与えられた命題について「どの程度」同意するかといった立場性を明らかにする問いがある点などに特徴があるといえる。

（3）IB の教育方法は、日本で行われる社会科系科目の授業に対して、学習指導要領で新たに示された「見方・考え方」の具体的な捉え方や探究型の授業の構想、長文記述式の問いやその評価方法などの点で示唆に富んだものである。日本の IB 実践校では、こういった問いに対応する力を養うためにも、内容（知識）にとどまらず、概念理解やスキルの習得をねらって、単元（Unit）ごとにパフォーマンス課題を含めた評価方法を構想しつつ実践を行っている。しかし、現状では受容に当たって多くの困難がある。まず、知識・概念・スキルをバランスよく配置したカリキュラムを編成すること自体の難しさ（概念理解そのものの難しさやスキルを意識するあまりバランスを崩してスキルに傾斜していくことなど）、得た学力を適切に問うための単元末の総括的課題（パフォーマンス課題）づくりの難しさがあった。さらに DP においては、国内の大学受験も見据えつつ一条校として学習指導要領で定められた学習範囲をくまなく学ぶためには教育課程編成上にも課題が多いことが分かった。

なお、COVID-19 の影響により、実践校訪問が十分に行えず、また公式セミナーの中止もあって、教育現場を通した意義と課題の検討については期待したほどの十分な成果を得ることができなかった。結果として、本研究も資料分析を中心とする方向へシフトせざるを得なくなったが、これまでに得た知見をもとにして IB の受容が学校や教員研修の場でどのように展開されているかについてのさらなる検討については、引き続き課題としたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計4件

１．著者名 細尾萌子、夏目達也、大場淳編著、上垣豊、ピエール・メルル、渡邉雅子、坂本尚志、三好美織、大津尚志、田川千尋、荒尾一彦、次橋秀樹著	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 298
３．書名 フランスのバカロレアにみる 論述型大学入試に向けた思考力・表現力の育成	

１．著者名 伊藤実歩子編著、奥村好美、徳永俊太、ロター・ヴィガー、坂本尚志、本所恵、西村教、二宮衆一、次橋秀樹、木村裕著	４．発行年 2020年
２．出版社 大修館書店	５．総ページ数 278
３．書名 変動する大学入試	

１．著者名 田中耕治編著、次橋秀樹ほか著	４．発行年 2021年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 274
３．書名 よくわかる教育評価［第３版］	

１．著者名 次橋秀樹	４．発行年 2019年
２．出版社 明治図書出版	５．総ページ数 128
３．書名 「『見方・考え方』の育ちをとらえる！パフォーマンス評価でつくる社会科授業モデル」『社会科教育』2020年1月号	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関